

性は3度の静脈炎（深部静脈血栓症）、感染（肺炎）、心不全を各1例認めた。治療関連死亡は生じなかった。

【結語】full dose の THP-COP 療法は強い骨髄抑制を生じ得るが、適切な補助療法の併用により比較的安全に実施可能であることが示唆される。現在、他施設共同研究での登録を終了し、安全性、完遂率、寛解率などを解析中である。

II. 特 別 講 演

「高齢者の急性骨髄性白血病」

東京都老人医療センター血液内科部長

森 真由美 先生

第29回新潟糖尿病談話会

日 時 平成12年3月25日（土）
午後1時30分より
会 場 新潟ユニゾンプラザ大会議室（4F）

I. 一 般 演 題

1) 当科外来における metformin の有効性について

河内 文女・長沼 景子
鈴木亜希子・五十嵐智雄
丸山誠太郎・石川 真紀
上村 宗・金子奈々子
金子 晋・羽入 修
大山 泰郎・中川 理（新潟大学）
相澤 義房（第一内科）

今回我々は、強いインスリン抵抗性を伴う2型糖尿病にBG剤を使用し抵抗性を改善できた症例を経験した。そこで当科外来で血糖コントロールが不十分な2型糖尿病患者35例を対象として、3カ月以上metforminを投与し、BMI、平均血圧、HbA1c、TC、HDL-C、LDL-C、TG、HOMA、PAI-1について検討した。投与開始後は有意なHbA1cの低下を認め、3ヶ月後に効果のある症例は6ヶ月後も有効性が維持できた。BG剤は肥満群に有効とされているが、非肥満群においてもHbA1cの改善を認めた。BG剤はインスリン分

泌を介さず血糖降下をもたらすため、インスリン分泌が低下した2型糖尿病にも効果があると考えられた。今後はBG剤の二次無効の有無、合併症への影響など長期的観察が必要と思われた。

2) 膵癌を併発した糖尿病の10例

小林 良太・佐々木夏恵
宮島 衛・奥泉 讓
田村 紀子・百都 健（新潟市民病院）
田中 直史（第二内科）

糖尿病の経過中に膵癌が発見された、当科の関係した10症例の特徴を検討した。過半数に腹痛の訴えがなく、急速に血糖コントロールが不良となった例が目立った。糖尿病診断から1年以内に膵癌が発見された2例については、膵癌による二次性糖尿病であったと考えられた。10例中外科的根治術適応は2例のみで、全例完治はしなかった。

当科教育入院患者（'95 - '99）1100例に施行した腹部超音波検査で、9例（0.8%）に膵癌が発見された。一般の膵癌罹患率等から検討し、スクリーニング目的の腹部超音波検査では糖尿病患者は非糖尿病患者に比べ膵癌を発見される頻度が高いと考えられた。

糖尿病初発例、経過中の急な血糖コントロール不良、腹痛や体重減少を訴える例には直ちに膵癌の否定を行う必要があり、日常診療上、血糖コントロール、慢性合併症に対する全身の管理と共に、悪性腫瘍の検索にも一層心がける必要があると考えられた。

3) 多発性筋炎（PM）、重症筋無力症（MG）、胸腺癌を合併した抗GAD抗体強陽性の1型糖尿病

佐々木夏恵・小林 良太
宮島 衛・奥泉 讓
田村 紀子・百都 健（新潟市民病院）
田中 直史（第二内科）

症例は61才の女性。家族歴に糖尿病、自己免疫疾患なし。昭和63年、口渇、体重減少、随時血糖516mg/dl、尿アセトン体陰性から糖尿病と診断された。グルカゴン負荷6分後の血中CPRは1.8ng/mlと低反応で、当初からインスリン治療を継続。平成6年12月全身の筋肉痛出現、筋力低下、CPK、LDHの上昇、EMG、筋生検より多発性筋炎と診断しステロイド投与を開始した。平成8年3月より夕方に眼瞼下垂あり、MGが疑われたがEMGが非典型的で確認がつかず経過観察。平成